

ほっとらいん
ふるむ
ほんこう

英国マギーズセンター——20年のあゆみとサポーターのエッセンス開催 「マギーズ東京」オープン記念 チャリティ講演会

マギーズセンターは、がんになった本人や家族、友人たちが不安なときに予約なしに訪れて、看護師、心理士などの心理・社会的サポートを受けられる場だ。居心地のいい家庭的な建築が特徴で、チャリティで運営され、無料で利用することができる。英国で1996年に誕生し、20年間で全英約20か所と中国（香港）などにも広がる。

その日本第1号となる「マギーズ東京」が、2016年10月10日に東京都江東区にオープンした。これを記念し、運営母体であるNPO法人マギーズ東京は翌11日にチャリティ講演会「英国マギーズセンター——20年のあゆみとサポーターのエッセンス」を開催。会場となった豊洲シビックセンターには、一般市民や医療関係者などおよそ300名が集まった。開会挨拶は、同法人の共同代表で、日本テレビ報道局記者の鈴木美穂氏。2008年に24歳で乳がんの診断を受け、その後のつらかった闘病の経験から今日までを振り返った。2014年にマギーズセンターを知り、「日本にもつくりたい」と、訪問看護師の秋山正子氏（現・マギーズ東京センター長）を訪ねてから2年半。双方の仲間たちと寄付を募って

オープンにこぎ着けた。

落ち着ける空間で 話を聴き一緒に考える

講演会第一部の冒頭では、英国マギーズセンターの事業開発部長、サラ・ピアード氏が、マギーズセンターの創設者であるマギー・K・ジェンクス氏がセンターをつくろうと考えたきっかけについて触れた。造園家で庭園史家でもあったジェンクス氏が、がんの治療中に「人の心を元気づけ、想像力を広げてくれるような場所、そして専門知識をもった専門家が話を聴いてくれる場所が欲しい」と感じたことがきっかけだったという。彼女が亡くなった翌年にマギーズエジンバラがオープンし、20年間で英国内と香港に広がった。国際的にも注目されており、日本だけでなく、スペインやノルウェー、オーストラリアなどでもプロジェクトが進んでいることも報告した。

続いて、エジンバラセンターのセンター長、アンドリュー・アンダーソン氏が、マギーズセンターで提供されている支援やプログラムについて紹介した。マギーズセンターは、情報支援、心理社会的支援、ストレスマネジメント、心が元

気づけられるような環境という4つの柱を大切にしており、これは「非常にシンプルだが、それを実現するための実践は複雑だと感じている」とアンダーソン氏。経験豊富で熟練した専門性をもったスタッフがじっくり話を聴き、一緒に考えることで、そこを訪れる人たちは自分の力を取り戻していくが、そのプロセスは「決して簡単なものではない」とも述べた。マギーズセンターは20年にわたり内部監査、外部監査を行ないながら新しい挑戦をしてきたことにも触れ、マギーズ東京にエールを送った。

国や文化を越えて 必要とされるもの

第2部のパネルディスカッションは、がん研究会有明病院副看護部長で、NPO法人マギーズ東京の理事も務める濱口恵子氏を座長に進められた。初めに共同代表の秋山氏が、2008年にマギーズセンターを知ってから道のりを語った。「日本にも必要」と翌年すぐに英国へ視察に行った秋山氏は、2011年、マギーズセンターに着想を得た「暮らしの保健室」を東京都新宿区に立ち上げるなどの活動を進めてきた。

2014年、鈴木氏との出会いでプロジェクトが加速し、さらに多分野の人たちの参加により、マギーズ東京が実現したという。一方、鈴木氏は、豊洲の土地の使用期限である2020年の、その先



チャリティ講演会の様子

を視野に入れて今後もファンドレイジングに力を入れていきたいと目標を述べた。会場から「文化の違い日本に根づくのか」との質問もあり、アンダーソン氏は「香港センターを立ち上げるときにも同じ議論が行なわれたが、杞憂だった」と回答。さらにピアード氏は、「気持ちが見えるようになるような空間に、専門職がいて自分の話を聴いてくれるというのは、国や文化が違っても、普遍的な欲求だと思ふ」と付け加えた。

最後に濱口氏の「マギーズ東京はチャリティでの運営も含めすべてが大きなチャレンジ。地域の皆さまに『私たちのマギーズ東京』といっていただけたような活動を続けていきたい」との言葉で会は締めくくられた。

（文）神保康子